

髄液中にメラニン色素を含有する異型細胞が出現した髄膜黒色腫症の1例

◎柏原 敦¹⁾、三谷 智恵子¹⁾、岩崎 克巳¹⁾、遠藤 康伸¹⁾
日本赤十字社 千葉県支部 成田赤十字病院¹⁾

【はじめに】今回我々は、髄液中にメラニン色素を含有する細胞を検出した髄膜黒色腫症の1症例を経験したので報告する。

【症例】47歳男性。

【既往歴】9年前に頭部外傷。

【現病歴】2022年、近医の脳ドック受診。右側頭葉にくも膜下出血を疑う所見を認めたため当院紹介受診。診察では明らかな神経学的異常所見は認めなかった。

【検査所見】血液検査は総蛋白 7.5g/dL、CRP 0.02mg/dL、血糖 92mg/dL、白血球数 3,800/μL、血色素量 14.7g/dL と基準値内で他にも特記すべき異常なし。

脳の画像検査では明らかな腫瘍性病変はなし。

髄液検査は、蛋白 89mg/dL、糖 36mg/dL、細胞数 23/μL、鏡検においては単核球優位で、そのほとんどが大きさはリンパ球より大きめで、細胞質辺縁は不明瞭、核の周囲に黒色の顆粒を認める N/C 比大の異型リンパ球様の細胞を認めた。直ちに主治医に連絡し、細胞診をはじめ種々の検査が追加された。6日後の髄液検査でも同様に大型で細胞全体

が濃染された様に観察される黒色調の細胞を少数認めた。髄液細胞診では class III、核小体腫大と高 N/C 比、細胞質内に黒色調の色素を有する単核細胞を認めた。

【経過】当初は外来通院にて経過観察中であったが、2022年12月にてんかん重積にて入院。2023年1月、2月及び3月に Pembrolizumab を投与するも効果が認められず、意識状態、呼吸状態が悪化し、入院45日後に永眠された。病理解剖の承諾が得られたため施行した。

【まとめ】脳脊髄液中にメラニン色素を含有する細胞が出現した髄膜黒色腫症を経験した。

検査中に通常みられない細胞等が検出された場合は、稀な疾患も考慮することが必要となる。それとともに医師や他部署との連携や情報交換が重要となる。今回はそれを強く感じた症例であった。

成田赤十字病院 0476-22-2311 (内線) 2282